

My Story

イーパーセル社長 北野讓治さん

大象不遊鬼徑
北野讓治

きたの・じょうじ 1962年岡山県生まれ。86年早稲田大学工学部卒業後、大東京火災海上保険（現あいおいニッセイ同和損害保険）入社。
91年保険ディーラーの会社を設立。2000年イーパーセル日本法人に入社、04年社長。06年に日本法人をグローバル本社化し、社長兼最高経営責任者（CEO）に就任。
継続する力が自らの一番の強み、と話す。柔和な表情の裏側には、ビジネスでの厳しい経験がある。

東京都台東区

仕

事に必要なのはお金かやりがい。古くて新しい問題に、北野さんもその命題に押しつぶされそうになりながら、必死に模索を繰り返してきた。

岡山県備前市に生まれた北野さんは、レンガ工場で働く職人の父と母の元で育った。早稲田大学理工学部に進学し、両親に心配をかけないよう、いくつかアルバイトを掛け持ちする日々が続いた。家庭教師や両国国技館でのゴミ拾い、そして「最も楽しい思い出」と語る東京・六本木の路上での花売りに出会う。

バイト代は1日5000円と、午後4時から深夜2時ごろまで働くことを考えれば稼ぎは必ずしも多いとはいえない。それでも自分が選んだ花を使ってお店を必ずオープンした。徐々に客から信頼を得て、常連客になる人が増えていった。「力を付けたらいつか、起業したい」と考えるようになった。

30歳直前、恩師に出会う 自分の歩む道見いだす

常連客の薦めもあって、就職先としてアントレプレナーシップ(起業家精神)制度のある大東京火災海上火保(現あいおいニッセイ同和損害保険)を選んだ。企業保険を専門に手掛ける契約社員で、働き方の自由度が高い。一方成果が自分の「お金」に直結する厳しい世界だった。だが蓋を開けてみると営業成績は常にトップクラス。月収が300万円を超え、社長を上回ることもあ

人をつなぎ明日に生かす

企業同士が安全に電子データを送るサービスで企業を支えるイーパーセルの社長、北野譲治さん。訴訟で「米グーグルに勝った男」として一躍有名となったが、それは本質ではない。見えてきたのは我を捨てて人と人をつなぎ、明日を切り開こうとする姿だった。

「自分が自信を持ち始めていた。だが入社3年目、26歳の夏に自信は砕かれる。取引先の社長と商談をしていたところ、こんな言葉を吐き捨てられた。『おまえの夢ってなんだ？ いい車に乗ることか、都心に大きな家を買うことか。そんな人生なら3億円で買ってしまうよ』」

大学進学に就職、家族にマイカー・マホーム。「自分が苦労して手にした人生の思い出のパーツ、そして未来すら、他人から買った3億円で買われてしまふのか。何のために仕事をするのか、その意味をここで見失う。ただ、他人の評価一つで左右される人生だけは避けたい」と思いが心の底に残った。

生きるこの意味とは何か。そんなとき、仕事を通じて偶然に出会ったのが、歴代総理大臣の指南役であり、北野さんが人生の師とおおぐこととなる四元義隆さんだった。

30歳手前の北野さんと、太平洋戦争を生き抜いて、国家とはなんたるかと考える四元さん。住む世界が違う2人が、四元さんの住む北鎌倉にある円覚寺でお互いに向かいあった。「座れ」自分を捨ててくれ。長い沈黙のあと四元さんから出てきたのはこの一言だった。

四元さんの言葉をかみ砕けば、「欲を捨て去り考え抜いた先に、自分の本当になりたいたいもの、やりたいことが見つかる」という意味だ。何回も何回も座禅するなかで、おぼろげながら一つの目標が見えてきた。自分にしかできないこと、それは自分が前に出るのでなく人々の結節点になることだった。

それならば、肩書を問わず、自由に議論できるサロンのようなものが作れないか。四元さんの言葉から見いだした行動がこれだった。様々な人の助けもあり、山岡鉄舟ゆかりの寺として知られる「全生庵」で勉強会、そして座禅会を始めた。

たった数人から始めたこの会は口コミで広まり、現在毎回30人が集まり、30年以上も続く。元首相の村山富市さんや元官房副長官の古川貞二郎さんなど様々な方たちが訪れ、どんな苦勞をして仕事に臨んでいたのか話していく。

新興企業の育成に向け グーグルとの訴訟挑む

全生庵の勉強会を通じて、自分の財産はお金ではなく、人をつなぎ、新たな価値を創造することだと気付いた北野さん。自らの仕事も保険業界からスタートアップへ、そして公の仕事へと広がり始めた。

契約社員、保険ディラーとしての独立を経て、2000年にITスタートアップのイーパーセルに入社した。同社は「電子物流」と呼ばれる、例えば新製品の設計図など機密性の高い情報を、電子データとして安全に送ることができる技術を持っていた。

北野さんは経営企画担当としてスカウトされた。だが、イーパーセルの経営力を高めていくことを目的に、株主に請われる形で04年に社長に就任し、経営全般を担うことになる。そこで、同社の技術や営業、知的財産を一つ一つ確認していくうちに、インターネットの

利用状況を集集・解析するなどの技術が、米グーグルの検索ワードと広告を連動したシステムに知らずに使われていることが分かった。

11年、北野さんはグーグルや米AOLなど海外大手IT企業の13社を相手取り訴訟に挑んだ。

必ずしも自信があったわけではない。それでも訴訟を起こしたのは、目的がグーグルから損害賠償金や特許使用料を得ることではなかったからだ。日本のスタートアップ企業の技術を世界に認めてもらう。「海外から技術を認めてもらえれば、次のスタートアップの育成につながる」と未来に生まれる企業に北野さんは思いを寄せる。

最終的にグーグルなどと和解にこぎつけた。今やイーパーセルの技術は大手自動車会社やIT企業、食品メーカーなど約8000社が導入している。イーパーセルの社長を務めるとともに、3年前からは請われて鹿児島共済会南風病院(鹿児島市)で副理事長を兼任している。南風病院に協力する老年医学の専門医師と厚生労働省の元次官とが北野さんを通じてつながったのが縁だ。この3人がタッグを組み、日本のこれからの課題である高齢者医療のモデルとなる病院づくりを進める。

「半白を過ぎたら自分しかできない仕事、公に尽くす仕事」。その思いは一段と強くなる。人々をつなぎ合わせ、新しい価値を生み出すために、さらに無私を貫く。

大西綾
山口朋秀撮影

My Charge

和菓子を求めて10千歩歩く



休日には散歩をかねて、文京区の音羽、中央区の人形町にある老舗和菓子店を訪れては、大福やどら焼き、たい焼きを購入している。その際は、例えば「10千歩いたら、大福を2個食べること

ある」と笑う。ひとときとなつている。お世話になった人に送る手紙のちょっとした言葉を考える時間にもなる。「考えていたことがぶつぶつと口をついて出てくることもある」と笑う。

仕事忘れる貴重なひととき



「ちょっとした運動になるのは何か。そう考え、始めたのが散歩だった(写真下)。忙しいときでも散歩の時間をひねり出すため、日々の予定の組み方、時間の使い方が変わったという。

ができる」と思うことで運動も食も楽しめるという。愛用するウェアアラブル端末「アップルウォッチ」を常に身につけ、歩いた距離と消費カロリーをにらめっこする(写真上)。

散歩をすることによる思わぬ効果もあった。「普段は運転することが多いが、散歩だと周りを見る景色やスピードがゆったりとしたものに変わることが多い」。散歩をすることで、仕事のことを少しの間忘れられる貴重なひとときとなつている。お世話になった人に送る手紙のちょっとした言葉を考える時間にもなる。「考えていたことがぶつぶつと口をついて出てくることもある」と笑う。

が落ちていく。海外出張中であっても泳ぎ続け、体重は70kgを切るようになった。スリットのサイズはXLに相当する54から、50へと縮まった。

「それ以上体重が落ちると資相に見えるからやめて」とドクターストップならぬ「家族ストップ」がかり、ベスト体重の70kg前後を維持するため、泳ぐ距離を2千から1千に減らした。

新型コロナウイルスの感染拡大で、プールに通うことが難しくなった。「相手との距離が保てて、ちょっとした時間